

幸田露伴の作品における 哲学的思想と観念論

Diana Donath ¹

幸田露伴 (1867-1947 年) ² は明治時代のもっとも著名な作家であるとともに、日本近・現代文学の最も優れた作家の一人と見られている。執筆能力、文体の優雅さと密度、また多産な創作活動と多面性に於いて、幸田露伴はドイツ人の作家 Thomas Mann (1875-1955 年) に並ぶものとされている。Thomas Mann は露伴の 8 年後に生まれ、8 年後に他界した。

露伴は同時代人、坪内逍遙、二葉亭四迷、山田美妙、尾崎紅葉、森鷗外、夏目漱石、樋口一葉などを背景にして見られなければならない。尾崎紅葉の紅と露伴の露に因む紅露時代という概念は 1890 年から 1894 年までの時期に限定されると見られている。露伴一葉時代という概念は 1896 年に限定されている。これは一葉が 24 歳の若さで亡くなった年である。森鷗外は、露伴より 5 歳年上だったが、露伴を高く評価した。露伴は、鷗外が 1890 年から出版した雑誌「目さまし草」に協力したが、12 年後、樋口一葉についての見解の違いで別れた。一葉が他界した後、露伴は一葉の作品を文壇で積極的に評価しつつあったが、鷗外は反対であった。

幸田露伴の翻訳はこれまで西洋ではすくなく ³、多くの同時代人より知られていないことは、露伴が異様に難しい文体で書いたからである。露伴は体言止めと言う目立つ名詞文体を優先させる。露伴がよく使っている漢字クラスター (漢字群・漢語表現) が仏教的な意味を示すことが多く、それを翻訳するには真の中国語能力および基礎的仏教知識を持つことが不可欠である。その上に、露伴は古典文学の引用文と暗示もよく使う。その理解のためには、日本古典文学と歴史の深い知識を必要とする。そのほかにも様々な表現により、露伴の創作は同時代人にとっても難しいものである。たとえば、正岡子規 (1867-1902 年) は「誰に理解されないことは、確かに作者の意図ではない」と訴えた ⁴。それ

から、正岡子規は露伴のテキストを読んで聞かせてみたが、露伴の使ったたくさんさんの漢字クラスターと訓読みの表現のせいで、もっと難しくなった⁵。

露伴は芸能に関する深い教養をもつ江戸幕府役人の家族に生まれ、8人の子供の4番目であった。2人は幼い時亡くなったが、6人はそれぞれに成功した。特に兄一人は実業家、もう一人は非常に尊敬されていた軍人郡司成忠、有名な音楽家となった妹2人、幸田延と安藤幸子。ピアニストの延は、奨学金を得た最初の日本人大学生だった。ボストンとヴィーンに6年間留学し、大正皇后の音楽レッスンを受け持った。幸子はベルリンでヴァイオリンを4年間勉強し、東京芸大の教授となり、将来の昭和天皇の後、長子を教えた。

露伴は5歳から17歳の間に7つの学校を転校した。英語を勉強し、漢学では徹底的な教育を受けた。特に自然科学に興味があった。1883年から電信技師の教育を受けた後、1885年から1887年まで北海道で電信技師の仕事に就いた。北海道では、アイヌの民族文化と歴史に触れた。これについてはたとえば短編小説『雪紛々』(1889年)がある。しかし、北海道の厳しい気候や単調な仕事に不満を持ち、東京に憧れを感じていたので、露伴は無断で仕事から逃げた。途中では、最初警察に追われて、お金もなく、ときどきは徒歩で旅し、よく野宿をした。草に枕する⁶、その時の経験に基づいて、ペンネームに露伴、露の道連れを選んだ⁷。

東京へ帰った後、父親の文房具店で働き、執筆を始めた。1889年、『風流佛』の出版によって文芸世界に作家として認められた。それから、様々な文芸雑誌に執筆すると同時に編纂者の仕事もした。根岸文芸団と硯友社の客員メンバーであった。1896年から1898年までの2年間、露伴は「新小説」と言う雑誌を編纂した。大学教育を受けなかったが、1908年から1909年まで、露伴は京都大学で教授として国文学を教えた。

1895年、露伴は初めて結婚した。妻の幾美子は3人の子供を生んだが、長女の歌(1901年生まれ)は11歳で亡くなった。露伴の愛していた息子成豊(1907年生まれ)は19歳で亡くなり、妻の幾美子は、15年間の結婚生活後、1910年、35歳で他界した。2年後、露伴はキリスト教の知識人児玉八代子と結婚した⁸。この結婚は不幸だったが、33年間に渡った。露伴のただ一人生存した子供、娘の文(1904-1990年)は有名な作家となり、露伴の一人の孫を生んだ、エッセーなどの著者青木玉である。青木玉は、露伴の一人の曾孫を生んだ。ドイツ文学専攻のエッセイスト青木奈緒。

世の尊敬を受けた露伴は⁹ 幼少時代には体の弱い体質ではあったが、80歳ま

で生き、1947 年の 7 月、亡くなった。

露伴の作品は大体散文であるが、脚本、詩集、紀行、エッセー集、歴史伝記や学術論文と論評も含まれている。

露伴の時代の文芸の主流は写実主義だったので、露伴は数回写実的小説を書いたことがあり、成功したにもかかわらず、露伴の作品の多数は文芸観念主義に属するとされている。露伴の作品、特に初期作品は、初期ロマン主義と言う範疇に属すると見られていて、日本人の文芸批評家は露伴の文学の幻想性を強調するので、主題から見られた露伴の作品のある部分は「悟道の文学」という概念で総括されている¹⁰。

しかし、露伴は自分を写実主義作家として見ていた。露伴は『小説は散文ですが、高い質の小説は現実の集めた影から作っている』と述べている¹¹。

井原西鶴（1642-1693 年）についての考えを表わした 2 編は¹²、露伴の初期創作時期の文芸理論的信条として見られる。即ち、「井原西鶴を弔う文」（1989 年 11 月）と「井原西鶴」（1890 年 5 月）で、西鶴の作品は「好色」と言う概念ばかりが強調されているが、西鶴の描いたその時代の現実、200 年後、明治時代の日常生活にも当たっている、と露伴は書いている。露伴は西鶴の文体を「誠」と「本情」の言葉で誉め、西鶴の風俗的草紙文学を平凡な人々への贈り物として見た。だが、2 か月後、露伴の西鶴に対する尊敬の念は薄れ、その後はまったく西鶴から離れた。自分の文芸目標を西鶴より高いレベルで見たからである。文芸批評家の川村二郎は（1971 年）、『露伴は世界を現実的に見ますけれども、幻想に進みます。現在の出来事を写實的に描写しますが、読者を空想な空間。。。永遠の次元に。。。または無形さの感覚に導くのです。』¹³と評していた。

一方で、典型的な個人主義者であった露伴は、いわゆる文芸範疇に分けられることに反抗した。露伴は自分の創作の原則は、「興味を持っていること、あるいは靈感が与えることを描写すること」（感興主義）だと述べた¹⁴。

露伴のフィクション的散文は、初期作品（1889-1891 年の時期）に強く表われている。その時期は、露伴が一番大切な作品を書いた時期である。露伴が得意としたのは、短い小説、或いは短編小説の方であった。長編小説を書く予定で書き始めた作品、『風流微塵蔵』（1893-1895 年）と『天うつつ浪』（1903-1905 年）は、日露戦争と日中戦争のせいで未完に終わった。

露伴の歴史小説で優秀な例は『運命』（1919 年）と言う中国の明王朝の第 3

の皇帝、中世の北京市を建築したことで有名な永楽帝（治政時期 1408-1424 年）についての伝記小説である。さらに、露伴は連環体と言う様々な散文段落から作られた作品も書いた。このジャンルの例は『連環記』（1941 年）である。また、晩年の露伴は芭蕉（1643-1694 年）について詳しい評釈を書いた。

芸術家と職人についての短編小説では、露伴は進歩的な個人主義とこれに関連して仕事への絶対的献身の理想を表現できた。この小説は、露伴の芸術の見方に展開があったことを表わしている。以前の芸術への賛美は、利益と名誉を考える見方に変わる。それに応じて、主人公たちは〈気高い工芸に携わる芸術家〉から〈単純な工芸家〉までの展開を示している。たとえば前者は『風流佛』（1889 年）の仏像彫刻師、『一口剣』（1890 年）の刀鍛冶屋、『五重塔』（1891 年）の塔建築家であり、後者は『風流魔』（1898 年）の金属彫刻師、『枕久物語』（1899 年）の陶工師である。

『五重塔』（1891 年）では、露伴は芸術家の自分の課題への絶対的献身の理想を描写する。この献身を通して、課題は見事な成功となる。『五重塔』は 1793 年の江戸の谷中の感應寺の塔の建築とその奉納式の日台風の歴史事実をフィクションとしたものである¹⁵。競い合う 2 人の大工、評判のいい棟梁源太とこれまで源太の世話にもなっていた大工十兵衛が、塔の建築に志願する。驚いたことに、十兵衛が感應寺の塔の建築を託される。十兵衛は謙譲な考え方で課題への完全な献身で、協力者を励まして、素晴らしい塔を建築することに成功する。だが、台風が襲う。十兵衛は自分の作品に自分を重ね、死を覚悟して、塔の一番上の階に立ち、台風に向き合う。やはり、十兵衛の制作は台風に持ち堪える。

露伴が生涯テーマとした人間の意志と運命の議論では、これは人間の意志を強調する注目すべき作品であり、明治維新による西洋的な自我意識に基づく考え方の影響も表している。

一年前の作品で、ロマン主義と神秘主義への強い傾向を表わす小説『対髑髏』（1890 年）では、露伴は人間の意志と運命の問題を全く違うものとして描いていた。即ち変えられない運命の宿命的な視点から、人間を運命の翻弄者として見た。

露伴と言う語り手である主人公は、冬の山の危険な徒歩旅行で、夕暮れを迎える。暗い沼のほとりで沓の底は切れ、たった一人くたびれはてて、露伴は質素な藁葺きの小屋に辿り着く。そこに、お妙と言う超自然的に奇麗で親切な、

心から人助けをする若い女が住んでいる。小屋の中に、寝床は一つしかなく、二人は夜を炉辺で過ごし、お妙は自分の身の上を語る。お妙は呪われて、社会から除外され、命の惨めな結末まで山で生きることになる。この理由により、彼女は結婚するつもりではなく、美男で若い貴族の結婚申し込みを断わった。この男は、実現されなかった憧れの苦しみで、お妙の目の前で亡くなった。この男の霊は、お妙を追いかけ、遠く離れたこの山小屋に導いたのである。死者の霊が死に係わりを持つ人に影響するのが、古典能のモチーフで、それを利用した構成がされているのである。

だが、夜明けの薄明りに、女も小屋も消えてしまう。露伴の足元には、髑髏しか残っていない。露伴が村に着くと、一年前らい病に酷く苦しみ、姿まで醜くなった27歳の女があちこちを彷徨い、怒り、猛り、荒れ狂ったまま、いずこにか消えてしまったそうだと聞く。お妙はこの幻だったということになる。

この小説では、宿命と言う概念は悲劇的な要素として用いられ、論理的にも心理的にも説明されていない。お妙が彼女の家族がネガティブなカルマを引き寄せたというようなことは一回も語られていない。

多くの場合、露伴の観念主義は哲学思想に基いている。つまり、仏教、特に禅仏教のテーマ、或いは道教思想を取り入れている。徹底的な仏教教育を受けた幸田露伴は、仏教知識を自ら経典を学ぶことによって深めた¹⁶。露伴の家族は数世代に渡って日蓮宗に属したが、1886年ごろプロテスタントに改宗した。それに対して、露伴は全生涯を通して仏教信者であり、座禅を修業した。

露伴の作品が仏教的テーマに関連することは表題で明らかになることもある。つまり『イシャナの園』(1915年)と『プラクリチ』(1932年)である。両者は仏教神話の女性人物である。

露伴の仏教思想を受容した作品としていろいろな例を挙げて行きたい。まず、露伴の芸術的、思想的な姿勢を示す小説として代表的な初期作品『風流佛』(1889年)が挙げられる¹⁷。複雑に、密に構造されたこの作品は、文芸批評家らに(坪内逍遙、森鷗外、石橋忍月、内田魯庵、田山花袋、高浜虚子などに)熱狂的に受け入れ、賛美され、露伴の作家としての評判を確立した。

『風流佛』は江戸草紙から派生する出世小説と展開小説の組み合わせである。露伴の自伝に材を得た旅を踏まえて、24歳の主人公、木造彫刻師珠運の精神的な成熟過程を描写している。日本の最も有名なお寺をめぐる修業の旅では、1889年の冬、雪に埋もれた木曽路で、恋愛に目覚め、愛の苦悩を創造の力に転換することによって、最終的に自分の最高の芸術品を作り上げる。珠運の成

長は日本の「道」の倫理理想に対応している。

お辰と言う 20 歳の女主人公が意外な出世を経験することが、珠運の苦悩の理由である。浪人であったお辰の父親は明治維新の騒動で出征し、お辰が生まれる前に消息を絶った。母親はお辰が幼いとき亡くなり、お辰は乱暴で思い遣りのない叔父に育てられた。賭場者である叔父は間もなく財産を失い、お辰を女中として使った。お辰を 100 銀の値で売る予定で、叔父が落ちぶれたみすばらしい小部屋でお辰を縛り、小部屋を鍵で閉めた時、珠運がお辰を発見し、救い出す。お辰を宿の主人の所へ送り、お辰はそこの養子として受け入れられる。珠運とお辰は恋に落ちるが、長い間準備した結婚式の日に、お辰は突然姿を消す。

後に明らかにされるように、お辰の知ることのなかった父親が急に出世をし、伯爵になった。父親の家臣はお辰を探しだし、彼女を東京の父親の屋敷に連れて行ったのである。そこで、彼女は裕福な結婚のための教育を受け、今では伯爵の娘という身分になったお辰が、名の知れた貴族と結婚する予定であるということを、珠運は新聞記事で読む。お辰が二度と戻らない事実を受け容れることが出来ない珠運は、数か月間、苦悩と苦しい憧れを乗り越えるために、絶対的な精神集中と献身でお辰の木像を彫刻する。

最初の創造過程で、木像に花の衣服を掛ける。壮大な木像の出来栄えは、観音菩薩のイメージに見えると珠運は思い、木像に光輪を加えて仏像にする。

第 2 の創造過程では、珠運は花の衣服を外し、今度は木像を全く裸に彫刻する。今出来上がった木像は、超越した美しさのイメージである。珠運の愛と創造過程中的献身によって、または強い精神的なエネルギーによって、まるで動き、話すことが出来るように、木像には自分の魂と神秘的な命が出てきた。

裸の仏像は、日本の仏教では想像できないことである。ヨーロッパのルネッサンスとギリシャの古典時代に由来する裸の女神の想像は、この時代、日本文学では全く新しいテーマであった。珠運の観音像が女神の命を得ると、法華経で叙述した観音の 33 体¹⁸に関して、崇拝者の誰もが観音像を自分の風俗と社会階級に応じる衣服で見えるようになる。誰もが彼女に向かうことが出来るという意味である。これは瞑想を通して、神様を視覚化する仏教の手段に基づいている。

露伴の諸説融合についての代表的な例は、観音菩薩が白い雲に立っている表現である。白い雲は大切な道教の象徴である。845 年の中国での仏教信者の迫害のとき、白雲は道教の勝利の象徴であった¹⁹が、『風流仏』の末尾で、珠運がお辰とともに自分が白雲に乗る幻想を見ることが関連していると思う。

『風流佛』の主なテーマは愛という現象の問題である。愛は悟性にも意志にも捕われない感情として理解されるし、仏教の学説の「空」と「唯識」に基づいて、全く主観的な現象、想像力と幻想から出来たこととして定義される。

『風流佛』は10章に分かれており、章の題は「十如是」という法華經に関する仏教語を見出しとしている。プロローグにもエピローグにも経文の引用が付いており、小説の最初と最後には仏教の主張が含まれている。この様々な手段は、小説に一皮肉な意味で一仏教論の外見を与える。

『風流佛』の表題にも皮肉な意味がある。元々風流は²⁰中国の3世紀の詩人と哲学愛好者の会の名前だった。その目的は、風の吹くこと(風)と水の流れ(流)とを尊ぶこと、そして様々な幸福の泉、自然に楽しむこと、食事を食べること、お酒を飲むこと、性愛を楽しむことであつた。だから、「風流」という熟語には「詩的な命の楽しみ」、「現世的日常的」、「美的で端正」、「精神的自由に気持ちよく」、「恋愛、情熱、好色」などの意味が加えられた。この観点から見ると、「風流」と「佛」の二つの概念を並置することも、皮肉の意味があるのは明らかである。

仏教思想、この場合は禅の思想が受け入れられた作品としてのもう一つの例は『観画談』(1925年)である。この小説では、露伴は二重の、集約した悟りの体験を描写する。過労による精神的な危機のため山のハイキングに回復を求める主人公は、猛烈な雨にあいまいな山のお寺で夜を過ごす。降り続く雨の音を聞くと、この単調なざあざあ降る音には、世界のどの音も、人間と動物の声や人造的な音、また過去にも現在も聞こえる音が含まれていることが、悟りのように分る。この直感的な統一体験が主人公を安心と喜びで満たし、彼は寝付く。

住民たちに起こされて、彼は押し寄せる大雨を逃れるために、山のもっと高い所にある小屋まで送られる。小屋の中には、壁の全面を占める大きな、牧歌的な景色を描写する絵がある。川や家や人が描かれ、山に囲まれている町で、それは多分キリスト教の天空のエルサレムの描写のような天国の象徴であろう。彼は瞑想によって絵に没頭し、絵の中に入る。すると絵は生き始める。しかし、小屋の中の蠟燭が冷たい隙間風にちらちらすると、活気のある光景は新たに生命のない、平面的な絵に変容する。彼の全存在の本質が含まれていた短い一瞬間、彼は永遠とアクセスした。この悟りの体験を通して、彼は精神的に回復し、後は、単純な農夫の生活を続け、理想的な冷静な状態に至る。

この直感的、短い禅仏教的な悟りの体験は二つの段階で起った。最初は、聞く感覚に意識を向けることによって、つまり気象の現象により引き起こされた

のである。その後、悟りの経験がより高いレベル、象徴的な意味のある山のより高い場所では、見る感覚に向けられて、そして美術品により引き起こされたのである。アジア的価値評価では、見ることは聞くことより高く評価されていることに対応している。主人公が農夫の生活に戻ることは、悟りの経験後、涅槃に入る可能性を諦め、その代わりに日常生活に戻って、悟りの経験を繰り返すことが出来るという禅仏教の原則²¹に依拠している。

仏教思想を表わすもう一つの例は、露伴の小説『土偶木偶』(1905年)である。仏教の再生輪廻の思想に基づいている。この小説では、露伴は直感的な記憶には、前生を思い出す可能性があるという確信を表現している。

主人公の幻一郎は(名前は道教的な概念「幻」が含まれている)、京都の骨董店で、古い手紙の断片を買い、色が褪せた文字を読んで見ると、突然火事が起き、手紙が燃えてしまう。夜の闇で、幻一郎は偶然に助けを頼む女に出会い、女を家まで送る。女の家も、家具も、女の雇い人も幻一郎にはますます親しく見える。結局、これは自分の前生の家、および女は自分が結婚前別れねばならなかった芸者の恋人だ、と幻一郎は理解する。彼女は燃えてしまった手紙を書いた人である。彼女のアイデンティティは左手の薬指の痣に証明されている。彼女は明らかに表題が暗示する土偶である。

次の朝、『対嚮嚮』のように、家が消えてしまった。これは幻一郎の現代への回帰という意味である。家の代わりに、前の恋人にそっくりなみすぼらしい衣服を着た聾啞の若い女が幻一郎を見上げる。彼女には同じ痣があり、前の恋人の再生である。彼女は表題が暗示する木偶である。彼女が聾啞であることは半覚睡の意識状態を象徴している。これは恋人の前生の苦悩の結果である。彼女は幻一郎から別れさせられた後、自殺したからである。幻一郎は現実の若い女と結婚し、一緒に東京へ帰り、彼女は聾啞から回復する。痣が同じ人が異なった存在を経験したことの証明として使われているのは、露伴が三島由紀夫に影響を与えたことから明らかである。これは三島の『豊饒の海』の基礎モチーフであるからだ。

露伴の解釈によれば、三つの世界は(というのは三つの時代: 過去、現代と将来) 続いて生じるのではなく、並列している存在である。露伴は再生輪廻の意味する仏教的な概念「三世」(サンスクリット語では tri-loka) と「三界」(三つの領域、サンスクリット語では tri-dhatuka) を利用した。「三界」の元の仏教的な意味は「欲望の領域」(kama-dhatu)、「形の領域」(rupa-dhatu) と「形のないことの領域」(a-rupa-dhatu) なので、時間的順番ではないと考えられる。

その故に、露伴は「三つの時代」は平行すると理解し、時間の観念も問い直したのである。

このような哲学的な思想はそのほかの小説にも含まれている。たとえば露伴の小説『新浦島』（1895年）である。この人気のある日本の童話は、時間の現象と平行した世界のテーマで露伴の興味を引いたのである。浦島太郎は神秘的な平行の世界、海の底に生きる龍王の娘のもとで、短く見える時を過ごしながら、同時に人間世界ではより長い時間が経った。露伴は童話に驚くべき展開を思い付く。そこに、二つの国際的なモチーフが含まれている。すなわちゲーテの『ファウスト』に基づく悪魔との契約、と分身のモチーフである。

浦島太郎の弟の100人目の子孫であり、現代の明治時代に生きる主人公次郎は、道教と真言宗の密教的な儀式によって、自分に魔法的な力を与える。これによって、魔王、又はサタンを自分の中から視覚化することが出来る。つまり、魔王を現わす。次郎の救いの要求に応じて、魔王は次郎を二つに分ける。この時から、次郎は「同須」と言う分身を持つ。この分身は次郎にとって全能の手下であり、次郎の贅沢と性愛などの全欲望を惨たらしさと犯罪の手段を使って実現する。次郎は人のポジティブな、人間的な性格を象徴し、「同須」は人のネガティブ、悪魔的な性格を象徴する。次郎は気が咎めて、「同須」に最後の命令を下す。つまり、自分を石化するということである。

この小説では、中国の陰陽の原則にも基づく善と悪の対立は、人間の分けた魂に当て嵌められ、分裂症の文学的な叙述で豊かにされる。ここで、露伴は仏教のカルマ（原因性の罪）の観念、と仏教の観点から見て、主な悪の根本、欲望（即ち所有物と性愛への欲望）は撲滅すべきだ、と言う原則をテーマにする。この場合は、石化することは全欲望を撲滅することを象徴している。

さらに、露伴は明治時代の最も著名な道教の専門家の一人であった。該博な漢学者露伴は、中国と中国文化に愛着があり、特に中国の道教は露伴の神秘主義への偏向に適うものであった。露伴は、彼の時代に珍しく、特に道教の古典書²²の徹底的な勉強に励んだ。日本文学研究者より、露伴は「中国道教を日本化した先駆者」と呼ばれている²³。露伴の多くの小説や学問的な作品の題名は、「道教」という言葉自身²⁴、或いはよく知られている中国道教の仙人の名前には²⁵、仙人という言葉自身²⁶、或いは「玄」、「幽」、「怪」²⁷などの道教のキーワードが含まれている。道教の影響は露伴の創作活動を通して、ほとんど最初の作品から最後の作品まで続いている。

露伴が1883-1887年の間に書いた、最初の作品『方陣秘説』は、道教の数の正方形の魔法に基づき、「数」と「時間」の現象についての興味深い哲学的憶測に頂点を成すのである。露伴は人の生きる時間を個人の運命として見做し、人間の意志と運命の相互の影響の問いは、すでに最初の作品に現れている。運命を決める最高の意志の存在がテーマである。こういうことは、特にキリスト教の新しい影響では、最高の存在があるという推量を許すが、後には非人格化され、道教と新儒教の「太極」（中国語で taiji）の観念に似ていることとして認識されている。

露伴の最後の作品の一つは、『仙書参同契』（中国語で Cantongqi、1941 年）といい、9 世紀 BC の古典書「周易」についての中国の 2 世紀からの注釈書をめぐっての道教哲学論である。この注釈書で露伴の注意を引いたのは、中国の新儒学の哲学者朱子（中国語で Zhu Xi、1130-1200）である。露伴の道教思想の圧縮した精髓を含むこの論書では、露伴は宗教的と哲学的道教の要素と発展の概観を与えている。露伴は仙丹の製作のための「外丹」と「内丹」という 2 つの錬金術のコンセプトも紹介する。露伴はこの二つのコンセプトを一つの単位として理解し、これを仏教の悟りに似た心境に及ぶための道教的手段として見る。この心境は、善と悪、さらに生と死の対立が乗り越えられる状態である。人は何もかも支配し、上述した「太極」を認めるも経験することもできる。この例には、露伴の豊かな文芸的な想像力が多くの場合は東アジア思想に根差していることが織り込まれている。

生涯を通して、露伴は現れの背後の真実を探した。彼の目指した目標は、狭くて、偏狭な、有限の世界との境を乗り越えることで、普遍的、永遠の領域に進入することであった。特に、露伴の小説の終わり方には、多くの場合、筋立てが、現実的な日常生活の領域から出て、象徴的と哲学的な意味に溢れた想像力と神秘の領域に達する。小説では、露伴は自分の目標を実現し、文芸的偉大さに達した。

注

- 1 著者は、ベルリン日独センターとドイツ学術交流協会による研究員として実践女子大学大学院博士課程に1993年より3年間在籍し、ヨーロッパの4大学で日本文学史と文化について教鞭をとり、著書は7冊ある。
- 2 幸田成行、幼児名前鉄四郎。
- 3 英語翻訳は: *Encounter with a Scull* (対髑髏、1890 年); *The Bearded Samurai* (髭男、

1890-96 年)；*The Five-Storied Pagoda* (五重塔、1891 年)、全部一冊で：*Pagoda, Scull and Samurai-3 Stories by Koda Rohan*、Chieko Irie Mulhern 訳、Tuttle 出版 1985 年 (Cornell University 出版 1982 年)；*The Pagoda* (五重塔、Shioya Sakae 訳、大蔵書店 1909 年)；*Leaving the Hermitage* (出櫃、1904 年、Nagura Jiro 訳、ロンドン 1925 年)。ドイツ語訳は：*Die fünfstöckige Pagode* (五重塔)、Walter Donat 訳、デュッセルドルフ、Diederichs 出版 1960 年；*Der Totenschädel / Die Buddhafigur* (対髑髏、風流佛)、Diana Donath 訳、edition q 出版、ベルリン 1999 年。

- 4 伊狩 1983、62 頁；渦沼 1989 年、132 頁。
- 5 私の『風流佛』のドイツ語訳は 2003 年国際交流基金の翻訳者賞候補となったが、日本人の文学研究者から日本語の原文を理解するための好手段と呼ばれたことがある。
- 6 「草枕」だが、万葉集から、日本詩文にはよく知られている枕言葉。野宿一草一露という結びつきになる。
- 7 そのほかに、いろいろなペンネームを使いました、特に「蝸牛庵」。
- 8 有名な新教教会の牧師、明治学院教授、大臣といろいろな協会の創立者植村正久 (1857-1925 年) の司式による結婚式。
- 9 文学博士 1911 年、帝国学士院 1927 年、帝国芸術院 1937 年、文化勲賞 1937 年等。
- 10 笹淵友一により；伊狩 1983 年、148 頁。
- 11 「客舎雑費」では、(読売新聞 1890 年 2 月)；杉崎 1975、359 頁。
- 12 Donath 1997a、第 V、3 章、229-230 頁参照。
- 13 川村 1971；日本文学研究資料刊行会編『幸田露伴・樋口一葉』、有精堂 1982、第 3 版 1987、16 頁、20 頁。
- 14 渦沼 1989、129 頁。
- 15 Donath 2009 参照。
- 16 法華経 (サンスクリット語 *Saddharma pundarika sūtra*)、*Prajñāpāramitā sūtra* のグループ、特に金剛経 (サンスクリット語 *Vajracchedika Prajñāpāramitā sūtra*) と般若心経 (サンスクリット語 *Prajñāpāramitā hṛdaya sūtra*) のほかに、主に華嚴経 (サンスクリット語 *Avatamsaka sūtra*) と円覚経 (サンスクリット語 *Śūrangama sūtra*) でした。1890 年、露伴は『般若心経第 2 義注』という般若心経の注釈を書きました。Donath 1997a、54 頁、参照；さらの文献の表示付き。
- 17 Donath 1997a 参照。さらの文献の表示は 98 頁；小説の翻訳は 251-328 頁。
- 18 第 25 章；Margareta von Borsig 訳、*Lotos-Sutra*, ed. Lambert Schneider 出版、Gerlingen 1992、364 頁。Donath 1997a、328 頁参照。観音菩薩の 33 体のなかに、法華経では観音の佛の体も枚挙するので、小説題に関連する「佛」という概念は観音菩薩にとっても当て嵌まるといえる。
- 19 中国の町では、主な道教のお寺は白雲に関して白雲観と呼ばれる (中国語では *baiyunguan*)。

- 20 Donath 1997a、第 B. 10 章、160-166 頁。
- 21 牛を飼い付ける寓言に表現しているように。
- 22 老子、莊子、列子 (Liezi)、韓非子 (Hanfeizi)、鬼谷子 (Guiguizi)、抱朴子 (Baopuzi)、呂不為 (Lü Buwei) 他。
- 23 伊狩章；Donath 1997a、88 頁参照。
- 24 『道教について』 1933、『道教思想』 1936 等。
- 25 呂洞賓 (Lü Dongbin)、『仙人呂洞賓』 1922 では、；白芥子 (Bai Jiezi)、『白芥子句考』 1921 では；王害風 (Wang Haifeng)、『活死人王害風』 1926 では等。
- 26 『仙人の話』 1922 等。
- 27 『玄談』 1938、『幽秘記』 1925、『幽玄洞雜筆』 1883-87、『怪談』 1928 など。

参考文献目録

- 出口智之 『幸田露伴と根岸党の文人たち：もうひとつの明治』、教育評論社、2011.7 (303p)
- 渡辺賢治 『幸田露伴研究 —「プラクリチ」を中心に』、大正大学大学院研究論集 35、2011.3、35-41 頁
- 渡辺賢治 『幸田露伴「玄談」試論 — 幽玄世界との境界』、国文学踏査 23、大正大学国文学編、2011.3、77-90 頁
- 斉藤礎英 『幸田露伴』、講談社、2009.6 (389p)
- 西村好子 『寂しい近代：漱石・鴎外・四迷・露伴』、翰林書房、2009.6 (374p)
- 井波律子、井上章一 『幸田露伴の世界』、思文閣出版、2009.1、(313p)
- 千葉眞郎 『幸田露伴試論 (1)「般若心経第二義注」について』、国文学踏査 20、2008.3、76-92 頁
- 登尾豊 『幸田露伴論考』、日本図書センター、学術出版会編、2006.10 (418p)
- 宮坂康一 『子規「月の都」と露伴「風流佛」— 音読と黙読のはざまで』、文藝と批評 10 (3)、2006.5、19-26 頁
- 関谷博 『幸田露伴論』、翰林書房、2006.3 (369p)
- 須田千里 『幸田露伴「観画談」「土偶木偶」の材源』、国語国文 75 (1)、2006.1、1-16 頁
- 牧野茂 『「土偶木偶」小論』、静岡福祉大学紀要、2005.1、100-92 頁 (sic)
- 竹盛天雄 『無名指 (くすりゆび) の小さな黒子 (ほくろ) —「土偶木偶」について』、文学 6 (1)、特集「幸田露伴」— 近代を渉る詩情、2005.1、161-171 頁
- 小峯和明 『仏教的想像力の沃野へ — 露伴と熊楠』、文学 6 (1)、特集「幸田露伴」— 近代を渉る詩情、2005.1、71-74 頁
- 瀬里広明 『露伴と道教』、海鳥社、2004.8 (239p)
- 岡田正子 『「風流佛」考 —〈珠運は如何お辰は如何になりしや〉をめぐって』、日本文藝研究 55 (2)、2003.9、39-66 頁

- 潟沼誠二 『露伴の因縁をめぐって』、語学文学 41、2003.3、3-9 頁
 岡田正子 『『風流佛』考（下）—「珠運」構想背景と狩野芳崖をめぐって』、日本文藝研究 54（2）、2002.10、21-40 頁
 岡田正子 『『風流佛』考（上）—「珠運」構想背景と狩野芳崖をめぐって』、日本文藝研究 54（1）、2002.6、1-15 頁
 幸田露伴 『幸田露伴集』、登尾豊ほか校注、岩波書店、2002.7、『新日本古典文学大系』、明治編 22
 岡田正子 『『風流佛』考：「発端如是我聞」と「團圓諸法実相」をめぐっての西欧的、キリスト教的視点からの考察』、日本文藝研究 53（2）、2001.9、37-61 頁
 水上勲 『露伴後年の道教研究』（二）、帝塚山大学人文科学部研究紀要 7、2001、11-27 頁
 水上勲 『露伴後年の道教研究』（一）、帝塚山大学人文科学部研究紀要 6、2001、1-15 頁
 西川貴子 『幸田露伴「観画談」試論 —〈移動〉と〈境界〉』、国語と国文学 77（4）、2000.4、44-58 頁
 山田利明 『露伴と道教』、李刊日本思想史 57、特集「幸田露伴と漢学」、2000、66-80 頁
 汪平 『「観画談」と「道得経」— 幸田露伴の人生観についての仏論』、曙光 10、1999.12、125-128 頁
 池田一彦 『幸田露伴「観画談」素描』、成城大学文学部紀要 131、成城学園創立 80 周年記念特集号、1998.2、33-47 頁
 中野翠 『五重塔』：「東京人特集 — 幸田家の人々」、1996、44-45 頁
 桶谷秀昭 『「五重塔」解説』；岩波文庫、第 88 刊 1994
 関谷博 『「対髑髏」の問題 — 煩悶の明治 23 年へ』；「日本近代文学」47、1992.10、108-121 頁
 伊狩章 『幸田露伴と江戸文学』、国文学解釈と鑑賞 57.5、1992.5、37-47 頁
 吉田悦志 『幸田露伴と仏教 — 「毒朱唇」と「対髑髏」にふれて』、国文学解釈と鑑賞 55（12）、近現代作家と仏教文学〈特集〉、1990.12、38-43 頁
 瀬里広明 『幸田露伴 — 詩と哲学』、創元社、1990（369p）
 潟沼誠二 『幸田露伴研究序説 — 初期作品を解説する』、桜楓社、1989（199p）
 瀬里広明 『露伴と現代』、創元社、1989（343p）
 菅谷敏夫 『『風流佛』論』；「露伴小説の諸相」、有限会社、1989
 二瓶愛蔵 『露伴 — 風流の人間世界』東宛社、1988（307p）
 瀬里広明 『露伴と道元』、創元社、1986（402p）
 塩谷賛 『露伴の魔 — その文献的研究』、角川書店、1984、第 3 版 1990（223p）
 徳田武 『「対髑髏」と「雨月物語」、西鶴、草紙』；「明治大学教養論集」174、1984、47-63 頁

- 伊狩章 『幸田露伴と樋口一葉』、教育出版センター、1983 (344p)
- 平岡敏夫 『幸田露伴』；「幸田露伴・樋口一葉」、日本文学研究資料刊行会編、1982、64-76 頁
- 日本文学研究資料刊行会 『幸田露伴・樋口一葉』、有精堂、1982、再版 1992
- 瀬里広明 『「観画談」とその背景』；「人文学科論集」17、1981、139-169 頁
- 二瓶愛蔵 『露伴と西鶴 —「風流佛」を中心として』；「幸田露伴・樋口一葉」、日本文学研究資料刊行会編、1982、51-63 頁（以前「文学語学」69、1975.10）
- 浅野春江 『紅葉、露伴、一葉について』；「国文学解釈と鑑賞」43、1978.5、180-184 頁
- 石田忠彦 『露伴の中の「風流」』；「国文学解釈と鑑賞」43、1978.5、63-69 頁
- 木村毅 『紅葉、露伴、一葉の共通性と移動性』；「国文学解釈と鑑賞」43、1978.5、6-14 頁
- 中村完 『五重塔』；「国文学解釈と鑑賞」43、1978.5、165-167 頁
- 登尾豊 『「対髑髏」論』；「文学」44、1976.8、1044-1058 頁
- 長友武 『幸田露伴と文明開化』；「琉球大学教育学部紀要」19、1976.3、93-97 頁
- 杉崎俊夫 『「風流佛」試論』；「幸田露伴・樋口一葉」、日本文学研究資料刊行会編、1975、42-50（以前「大正大学研究紀要」61、1975.11、355-365）
- 高木茂雄 『幸田露伴の「方陣秘説」』；「幸田露伴・樋口一葉」、日本文学研究資料刊行会編、1975、36-41 頁
- 河盛好蔵 『幸田露伴集解説』；「日本近代文学大系」6、角川書店、1974、8-34 頁
- 登尾豊 『「風流佛」論 — 愛の逆説弁証法』；「日本文学」、1973.6
- 福本和夫 『幸田露伴 — 日本ルネッサンス試論からみた』、法政大学出版局、1972 (497p)
- 川村二郎 『観察から幻視へ — 幸田露伴論』；『幸田露伴・樋口一葉』、日本文学研究資料刊行会編、1971 年、15-25 頁；以前「文学界」1971.1
- 登尾豊 『五重塔の薄風雨 — 露伴文学再評価のために』；日本文学研究資料刊行会（同上）、77-94 頁（以前「国語国文学研究」6、1971.4
- 猪野謙二 『露伴 — もう一つの近代』、「文学」38、1970、1-13 頁
- 平岡敏夫 『幸田露伴』；「国文学解釈とかつとつすたか鑑賞」34、1969. 1、67-72 頁
- 平松日吉 『露伴の「新浦島」の世界』、国語の研究、1966.3
- 瀬里広明 『露伴文学における華嚴思想について』；「語文研究」、九州大学、1966.2、38-48 頁
- 瀬里広明 『幸田露伴と西田幾多郎 — その文学と哲学の底にあるもの』；「文学語学」35、1965.3、81-90 頁
- 成瀬正勝 『紅葉と露伴における小説の理念』；「国文学解釈と鑑賞」31、1965.1、20-24 頁
- 高塚次夫 『「五重塔」』；「近代文学研究」1958.11

- 笹淵友一 『幸田露伴 — キリスト教的ロマン主義』；「ロマン主義文学の誕生」、明治書院、1958
- 塩谷賛 『「風流佛」、「対髑髏」解説』；新潮社 1956、90-102 頁
- 幸田文 『禪』；「読書新聞」、1950.8、2 頁
- 塩谷賛 『「方陣秘説」解説』；「明治大正文学研究」、1950
- 日夏耿之介 『鴟外と露伴』、創元社、1949 (323p)
- 斎藤茂吉 『幸田露伴』、洗心書林、1949 (216p)
- 岡崎義恵 『露伴の風流思想』；「露伴芸術思潮」2b、岩波書店、1948
- 柳田泉 『露伴文学の世界』；「新小説」、1947.9
- 斎藤茂吉 『「幸田露伴集」解説』；「近代日本文選」、東方書局、1947
- 高浜虚子 『「対髑髏」の夢』；「朝日評論」1946.9
- 柳田泉 『幸田露伴』、中央公論社、1942 (472p)
- 石橋忍月 『新潮百集第五号「風流佛」』；石橋忍月評論集、岩波書店、1939
- 塩田良平 『「対髑髏」と「一口剣」— 幸田露伴』；「日本文学大系」11、川出書房 1938.7
- 塩田良平 『初期ロマン主義と露伴』；「文学特集 露伴研究」、1938.6
- 漆山又四郎 『漢学者としての幸田露伴先生』；「文学特集 露伴研究」、1938.6
- 千葉亀雄 『風流佛ほかとその時代』；「早稲田文学特集明治文学」、1925

外国語翻訳と参考文献

- Donath, Diana** (2009): *Kôda Rohan*, in: *Kindler's Literaturlexikon*, Metzler, Stuttgart
- Donath, Diana** (2001): *Kôda Rohan in seinem literarischen Umfeld*, in: *11. deutsch-sprachiger Japanologentag in Trier 1999*, vol. 2, LIT publ., 199-210
- Donath, Diana** (1999): *Begegnung mit einem Totenschädel* (translation of the novellas *Taidokuro and Fûryûbutsu* by Kôda Rohan, with scientific annotations and afterword, 165 p), edition q, Berlin
- Donath, Diana** (1999): *Buddhistischer und daoistischer Mystizismus bei Kôda Rohan*, in: *NOAG* vol. 165/166, 35-43
- Donath, Diana** (1998): *Buddhist and Daoist Mysticism in Kôda Rohan's Works*, in: *Asiatische Studien* vol. 52/4, 1059-1068
- Donath, Diana** (1997a): *Kôda Rohan und sein repräsentatives Frühwerk Fûryûbutsu – Ein Beitrag zur Rohan-Forschung* (PhD thesis, 380 p), D. Born, Bonn
- Donath, Diana** (1997b): *Kôda Rohan und sein frühes Hauptwerk Fûryûbutsu*, in: *Referate des 10. Deutschsprachigen Japanologentags in München*, CD-ROM, University of Munich, 410-415
- Donath, Diana** (1996): *Kôda Rohan und sein repräsentatives Frühwerk Fûryûbutsu*, in: *Bochumer Jahrbuch zur Ostasienforschung*, vol. 20, Brockmeyer, 187-193

- Donath**, Diana (1996): *Kôda Rohan and his Early Main Work Fûryûbutsu*, in: *The Japanese Traditional Thought and the Present*, The Japan Center Prague and The Charles University Prague, 8-15
- Mulhern**, Chieko Irie (1985): *Pagoda, Skull and Samurai – Three Stories by Kôda Rohan* (translation, 260 p), Tuttle (previously at Cornell University 1982)
- Keene**, Donald (1984): *Dawn to the West – Japanese Literature in the Modern Era*, vol. *Fiction*, chap. 7: *Kôda Rohan* (150-164), New York
- Donat**, Walter (1960): *Die fünfstöckige Pagode* (with an introduction), Eugen Diederichs, Düsseldorf-Köln

(デアiana ドーナト・実践女子大学大学院元研究生)